



# 農業が おもしろくなる 私の情報活用 12

## 自動車産業の町で進む 「都市と農山村の共生」 への取り組み

愛知県・JAあいち豊田

編集部

### 豊かな田園都市をめざす 自動車の町

自動車産業の町、豊田市は、周囲の町村との合併もあって、森林七〇%を占める自然豊かな田園都市でもある。しかし、農家の高齢化、農家数の減少が進み、遊休地・荒廃地が増え続けている。そんななか新しい豊田市は、都市づくりの理念に「都市と農山村の共生」を掲げた。豊田市を管内とするJAあいち豊田（正組合員約一万五〇〇〇人）も市と協力しながら、地域の農業を守るというんな取り組みを進めている。

まずは、農家の手取りの確保。これにむけ平成十五年から「一営農センター二

三品目特産運動」を展開している。主な品目はナス、イチジク、イチゴ、ヤマゴボウ、ジネンジョなど。

露地ナスは比較的费用が少なく、イチジクは二年目から収益があがる。イチゴはほとんどが地元消費で色を充分のせて収穫、新鮮で甘いと評価は高い。

ヤマゴボウには数十名の農家が取り組み、その一部はJAの加工施設で味噌漬けされ、「小原漬け」としてJA産直ブランドなどで販売、歯ごたえのある食感人気を呼んでいる。ジネンジョのパイプ栽培（品種：夢とろろ）も本格化し、粘りが強い地場産の味を楽しんでほしいと、五〇戸近い農家が張り切っている。いずれも比較的小面積で一定の収益が見



営農部の皆さん。左から宇野達也さん、伊藤茂樹さん、杉山司さん

込める高齢者むき品目だ。

市内で生産された野菜や果物は地元市場出荷も含め、その多くは地元消費。また、管内には五〇以上の直売所があり、JAも直売に力を入れている。

こうして地産地消で小さな農家の所得を確保しながら、JAでは市と連携して、新規就農者の育成や貸し農園などの取り組みにも力を入れている。

豊田市には、高度経済成長期に全国から自動車関連会社へ就職した市民が多く



「農ライフ創生センター」の皆さん。左から加藤浩さん、児嶋所長、JAから出向している加藤政治さん

定住しており、まもなく迎える団塊世代の定年退職は、年間二、三〇〇〇人規模になるといわれている

そんななか、平成十二年度に定年退職者や女性を対象に「生き生き農業塾」を発足させ、そして平成十六年には、市とJAが共同で、就農希望者に対して研修や農地の仲介などを行なう「豊田市農ライフ創生センター」を開設した。非農家が農業に参入しやすくするために、農地法の規制緩和（農地の権利取得後の経営面積下限を、現行の四〇a以上から一〇

a以上とする）を盛り込んだ「農ライフ創生特区」（構造改革特区）の申請を県と共同で行ない、認定を受けた。来年にはいよいよ卒業生がでる。

こうして豊田市は、地産地消と農都交流で「豊かな田園都市」をめざしている。

### 営農も涉外も

### 農家のよき相談相手に

そんなJAあいち豊田が「ルーラル電子図書館」の法人会員になったのは、二〇〇三年十二月。それ以来約一年半、閲



センターでの耕耘機の使い方実習

覧ページは六三三四ページにのぼる。

「農業技術大系」が一番多く、記事数で六九一（三八七三ページ）、ついで「病害虫・雑草の診断と防除」四七八本（一五〇五ページ）、「現代農業」二二五本（八〇二ページ）。

どんなふう利用されているのだろうか。

営農部の皆さんに集まってもらい、話を聞くと、まず出てくるのが病害虫の診断。病害虫にやられた現物を持ち帰り、「ルーラル電子図書館」の絵解きや症状写真を見て調べる。農家から病害虫についての電話が入った時には、予測される病害虫の写真入り記事を持参していく。

「最近では農家がつくる品目が増えて、問い合わせのあった病害虫をもっていくと、ほかにこつちも見てくれと、準備してないことを聞かれることが多い。農家の畑でルーラルが見られるようになるとうれしい」といのは、伊藤茂樹さん。安心・安全にむけ、「農業検索コーナー」が農業の使用基準を簡単に引けて役だっている、と宇野達也さん。

一方、笠井聰さんは、「農業技術大系」の「土壌施肥編」の記事を愛用している。涉农（営業）担当で、肥料などの販売をしているが、「肥料を売るには、なぜ、その肥料がいいのか。それをどう使うかについて、農家の質問に答えなければなりません」と笠井さん。そこで、土と肥料の基礎を勉強しようと、「土壌施肥編」3巻の「作物の性質と土壌」、第2巻の「元素の吸収と生理作用」、第6巻の「作物別施肥技術」、そして第7巻の「各種肥料の特性と利用」の記事を取り出し、ファイルに綴じて家においている。こうしておく、ナスならナスの、適した土壌条件から養分吸収特性、施肥の方法、使う肥料の選択まで、横断的に知識が得られる。一方、カリならカリについて、土壌のなかでの動きから作物の吸収のされ方や生理的な働き、カリ肥料の種類と使い方まで、実践的な「カリの基礎知識」が得られる。

日中は外回りで忙しく、農家の話を受けて夜、調べることが多い、という。「肥料や農薬を売るだけでなく、それを

使って農家がよくなつてもらいたい」と笠井さん。営農と涉农を一体化し、農家に出向いてよき相談相手になることがJ A、とくに大型合併したJ Aで課題になっているが、J Aあいち豊田の営農部の皆さんは、そんな現場密着型の営農指導の武器として「ルーラル電子図書館」を活用している。

イノシシやモグラ対策、あるいは税金対策など、「現代農業」の記事の利用も、農家の相談にのつてのこと。「現代農業」の読者から、確かこんな記事があったはずだが、いつの号か調べてほしい、という相談もあるという。

### 農ライフの創生を支援

J Aから「農ライフ創生センター」に向向している加藤政治さんも、病害虫を中心に時々「ルーラル電子図書館」を利用している。

この「農ライフ創生センター」は、二一年間で農業のセミプロを目指す「担い手づくりコース」三科（畑、田畑、果樹科）と、月一回のペースで半年間の研修を行



1期生の大上秋義さん

なう「旬の野菜づくりコース」があり、「担い手」コースは一期生三二名、二期生三八名。一期生の場合、六〇代が一九名、五〇代が五名である。

センターでは、ナスやイチジクなどで「一〇aで一〇〇万円の所得」をあげられる農業をめざしているが、実際には「大きな家庭菜園のようなもの。それはそれで生きがいにもなるし、大事なことです」と所長の児嶋宏之さんはいう。

センターの農場で作業をしている、大上秋義さん（一期生）に話を伺った。

二年目になると、一八〇㎡の畑があてがわれ、自分の責任で栽培しなければ



ソルゴーに囲まれた大上さんの畑。スイカや地這いキュウリの畑にはネギが植わっている

らない。その出来のようすで「これなら一〇aできそつだ」と評価されると無事卒業、土地の斡旋を受けられる仕組みだ。大上さんは、二年前にトヨタ自動車を退職、淡路島の農家の出身で、一八歳でトヨタに就職するまで、朝晩の牛の草刈りなどの手伝いをしてきた。七年前から家庭菜園をはじめ、退職を機に、どうせやるならと、「小さい農業」をめざすことにした。



トマトのわきには、虫よけを兼ねてバジルを植えた

ギが植えられている。ソルゴーはバンカープランツとして天敵を増やし、ネギ類やハーブで虫よけ、病気予防をねらう。「センターでの講義のほか、『現代農業』などの本や、センターで見せてもらった井原豊さんのビデオを参考にしています」と大上さん、「勤めていたときは決まりきった仕事で、勉強の必要はなかったが、農業は勉強しないとやっていけない」といふ。



センターの教室の書棚。「現代農業」や農文協のビデオ、書籍がおいてある

が指導に当たっているが、はじめは嫌がっていた農家もやがてよくしゃべる先生に変身するといふ。センターでは「現代農業」や書籍、ビデオなどをおき、貸し出しもしている。インターネット環境が整備されていないため、今のところ、「ルーラル電子図書館」の利用は、出向しているJA職員の加藤さんだけが、いずれは役だててほしいと思う。先月号の武藤光史さんが述べているように、「心がまえから作業まで、『ルーラル電子図書館』は団塊帰農の応援団」なのだから。